



No.05

天竜病院

Interview
森 一夫 / 療育指導室長

心地よい光と音の共演が心を揺さぶる スヌーズレン療育



患者さんに寄り添う、松本羽純保育士。「私たちが触るのを嫌がっていた患者さんでも、膝枕ができるようになりました」と嬉しそうに話す

天竜病院のスヌーズレン専用室。必要に応じてアロマを焚くこともある。光る泡が昇っていくバブルチューブ(3本の柱)、細長い光のチューブ、触ることができるファイバーグロウ(右側の淡いピンク)、さまざまな色に変化するライトニングプラネット(左側のボール)などの光系スヌーズレン器具が充実している

薄暗くした部屋の天井や壁一面に流れていく光。ゆったりと流れる心地よい音楽。天竜病院(静岡県浜松市)のスヌーズレン専用室でみられる光景です。

スヌーズレンは、オランダ語のスヌッフレン(クンクン匂いを嗅ぐ)、ドゥースレン(ウトウトまどろむ)という言葉を組み合わせた造語です。光(視覚)・音(聴覚)・匂い(嗅覚)などを組み合わせ、心地よい環境をつくり、さまざまな感覚を刺激することでリラックスを促します。1970年代にオランダの障がい者施設で考案された療育法で、日本では1990年代から急速に広まり、今では高齢者施設などにも広く普及しています。普段はほとんど手足を動かさない重症心身障がい児(者)の患者さんでも、スヌーズレン療育中に手足を動かすなどの反応が急にみられることもあります。

天竜病院のスヌーズレン療育は、重症心身障がい児(者)病棟に入院している患者さんを少人数のグループに分け、週1回(1回30~40分)のペースで行われています。毎回、入室時のチャイム、薄暗くして音楽を流しながら光系スヌーズレン器具を使った療育、終了とともに徐々に明るくなる照明、終了の音の合図、といった内容です。スヌーズレン療育は、徐々に効果が現れるようになるので、同じ内容を何度も繰り返します。

河合美苗保育士は、「ある患者さんでは自傷行為がなくなるので、リラックスしているのが分かります」と語ります。また、森一夫療育指導室長によれば、普段は表情の変化が少ない患者さんでも入室時のチャイムで笑顔になる方がいるといいます。スヌーズレン療育中の児童指導員や保育士たちは、ささいな変化

を見逃すまいと1対1で患者さんに寄り添っているから、身をもってその効果を実感しているのです。

一般的に、患者さんの反応はさまざまですが、スヌーズレン療育はリラックスをもたらす有効な方法であると考えられています。今年(2018年)4月から天竜病院で働き始めた四方山紗希児童指導員の「私たちと同じように、五感で感じて癒されているのだと思います」という言葉に、すべての人に共通する効果を読み取れます。



天竜病院 (静岡県浜松市)

許可病床数 328 床。内科のほか、重症心身障がい児(者)、神経・筋難病、児童精神を柱とする地域の拠点。2012年に6階建ての新病棟が完成した際にスヌーズレン専用室が整備された。